



Weekly Market Report

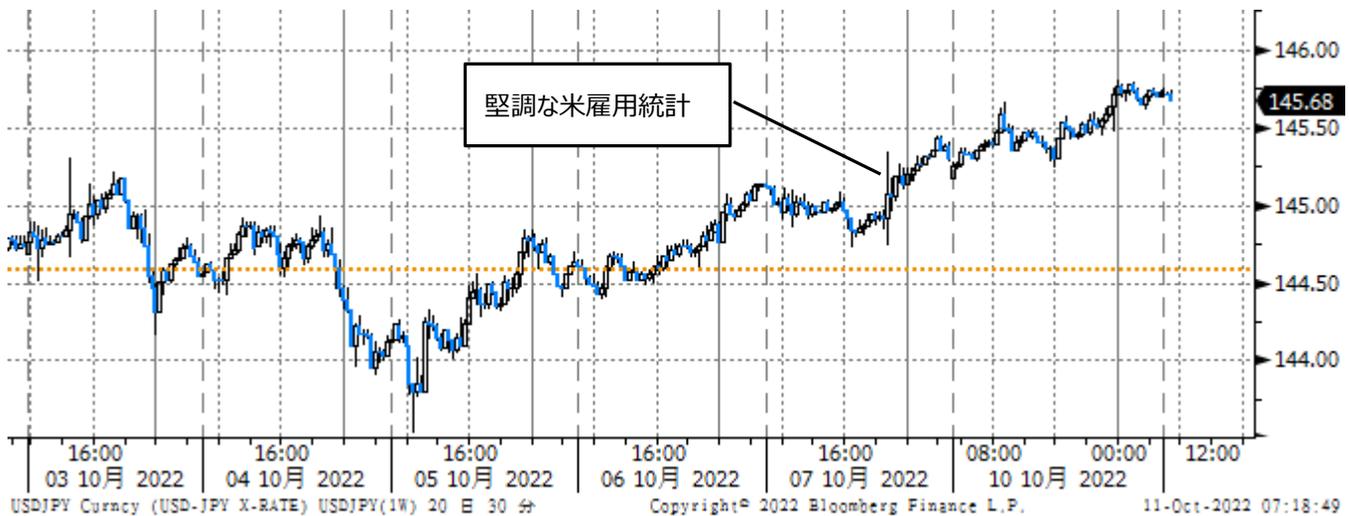
Oct 11, 2022

FX, JPY Interest Rate, Topics

1. 為替相場概況

米金利の高止まりがドル円相場の押し上げ材料となるが、介入警戒感が上値を抑制

USD/JPY (1週間の値動き)



コメント

(出所) Bloomberg

先週のドル円相場は週後半にかけて上値を試す展開。週初は前週末の良好な米個人消費支出を受けて144円台後半からの開始となり、投机筋の仕掛けで145円を越える場面もあったが、介入への警戒感から反落。米ISM製造業指数が予想を下回ったことやJOLT求人件数の急減を受けて米金利が低下すると、ドル円相場は一時143円台まで下落したものの、米ISM非製造業指数でサービス業の強さが示されたことやミネアポリス連銀のカシュカリ総裁からの「利上げの打ち止めまではかなり遠い道になる」といった発言を受けて再び145円台まで上昇する展開となった。週末の米雇用統計は予想を上回る堅調な内容となったため、ドル円相場は145円台後半まで上昇している。今週のドル円相場も高値圏でもみ合う展開か。引続き米金利の高止まりがドル円相場の押し上げ材料となるが、米国景気の後退懸念や介入への警戒感が上値の抑制要因となってくる。経済指標では木曜日に発表される9月の米消費者物価指数が注目となる。(チーフ・マーケット・ストラテジスト/諸我)

今週の経済指標 (予定)

日付	イベント	予想
10/12(水)	(米国) 9月卸売物価指数 (前年比)	8.4%
10/12(水)	(米国) FOMC議事要旨	-
10/13(木)	(米国) 9月消費者物価指数 (前年比)	8.1%
10/14(金)	(米国) 9月小売売上高 (前月比)	0.2%
10/14(金)	(米国) 10月シガン大学消費者態度指数	59.0

USD/JPY (5年間)



(出所) Bloomberg

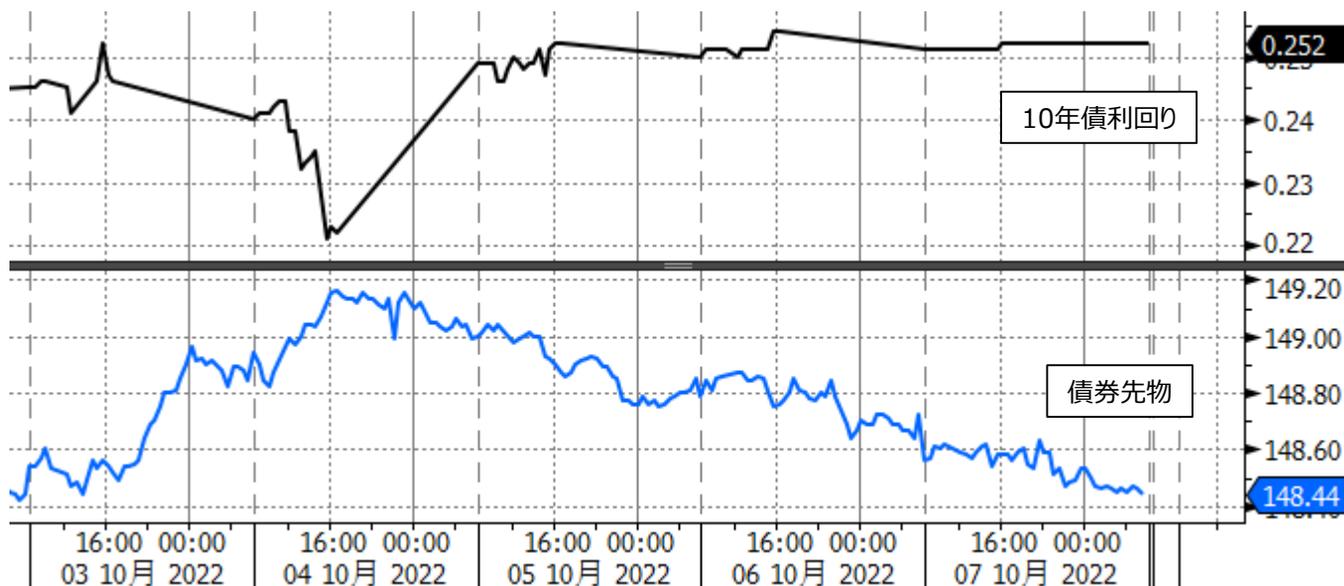
今週のレンジ予想 (USD/JPY)

予想者	今週のレンジ	予想のポイント
嵯峨大輝	144.00 - 147.20	引き続き介入警戒感が残るものの、日米金利差から上値を試す展開。CPIの結果次第ではさらなる上振れに注意が必要。
山下航平	144.50 - 146.50	本邦介入警戒感が根強く残るものの、13日発表の9月米消費者物価指数が予想を上回ればドル円はもう一段の上昇も。

2. 円金利相場概況

引き続き、金利上昇圧力の強い展開を予想。今週は米CPIの結果に注目。

10年国債金利と債券先物（1週間の値動き）



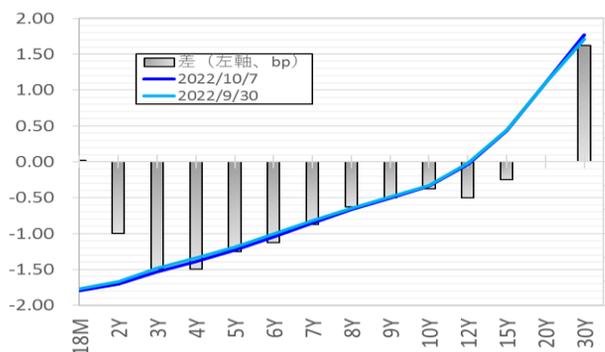
GJGB10 Index (日本国債10年) JGB.F 20 日 30 分 Copyright © 2022 Bloomberg Finance L.P. 11-Oct-2022 07:20:36 (出所) Bloomberg

コメント

先週末の10年国債金利は0.22%台から0.25%台のレンジで推移。週初、クワテング英財務相が所得税における最高税率引き下げ計画の撤廃を発表したことや、米ISM製造業景況指数が弱めの結果となったことから、欧州及び米国債利回りが大きく低下。この流れを受け、10年国債金利は0.22%台前半まで低下した。火曜日には、豪中銀の+25bpの利上げ(市場予想: +50bp)がサプライズとなったものの、日米債券市場での反応は限定的。水曜日、OPECプラスにおいて11月に日量200万バレルの減産が発表されたことや、米ISM非製造業景況指数が堅調な伸びを見せたことから、10年国債金利は再び0.25%近辺まで上昇した。週後半にかけては、金曜日発表の米雇用統計を控え様子見ムード。米雇用統計については、非農業部門雇用者数が前月+26.3万人と市場予想(同+25万人)を上回る伸びを見せ、失業率は3.5%、平均時給は前年同月比+5.0%と米国労働需給の引き締めりを改めて示す結果となり、10年国債金利はYCC下での変動上限である0.25%近辺で越週となった。

今週は、FOMC議事要旨の公表や米CPIの発表が予定されている。10年国債金利は引き続き、0.25%近辺での推移を予想。(市場営業部/加藤)

金利スワップ変化（1週間）



10年円金利スワップ推移（5年間）



今週のレンジ予想（10年国債利回り）

(出所) Bloomberg

予想者	今週のレンジ	予想のポイント
正村光太郎	0.22% - 0.26%	英国発の懸念は一旦収束し、再び0.25%程での推移を予想。水曜の国内30年入札、FOMC議事録、木曜の米CPIに注目。
伊豆浦有里恵	0.235% - 0.255%	欧米長期金利上昇への警戒感は根強く、債券の弱気相場は継続しそう。30年国債入札が無難に通過するか注目。

3. 今週のトピックス

ユーロ相場アップデート

利上げ加速などインフレ抑制策が相次ぐが、ユーロ圏の景気は後退局面入りへ

ECB金融政策

9月8日に開催された政策理事会で、ユーロ誕生後初となる0.75%ポイントの利上げを実施。7月理事会に続く利上げによって、政策金利は欧州債務問題に揺れた2011年以来の高水準となっている。ラガルド総裁は会合後の記者会見で、高インフレが長期化するリスクを指摘。また、声明文には「需要を抑制し、インフレ期待が持続的に上方シフトするリスクを避けるために、さらに政策金利を引き上げる」と明記されており、利上げ継続の姿勢を鮮明にしている。会合後に公表された経済・物価見通しでは、23年以降の成長率が下方修正された一方、インフレ率は上方修正。ECBは、景気を抑えてでも高インフレを抑制する姿勢を強めており、今後複数会合にわたって利上げが実施される見通し。

エネルギーの供給制約が経済を下押し

ユーロ圏景気は10~12月期以降、後退局面に入る見通し。経済再開に伴うサービス消費の回復が一巡するほか、ロシア産天然ガスの供給不安を受けたエネルギー価格の高止まりが企業収益や個人消費の重石になっている。加えて、ドイツなどの主要国ではエネルギー利用の節約などが生産の下押し要因となる見込み。ロシア産資源の代替は徐々に進むものの、来年以降も経済見通しを下方修正している。ユーロ圏インフレ率は、原油・天然ガスや飼料穀物などの商品市況の高まりを主因にECBの目標である2%を大幅に上回る水準で推移しており、高インフレの沈静化には時間を要する見込み【図2】。

今後のユーロ相場展開

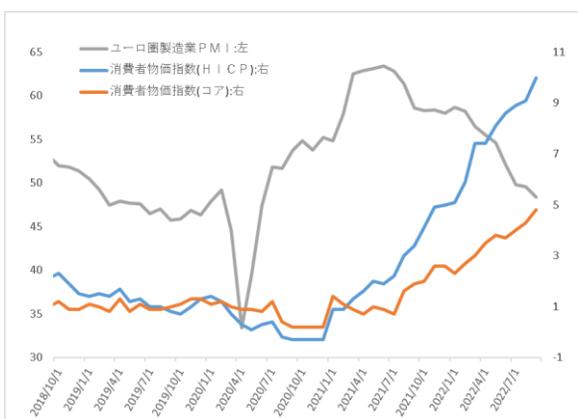
ユーロ圏景気に対する懸念がユーロを減価させる公算。ウクライナ侵攻を受けた対ロ制裁への報復として、ロシアはドイツ向けの天然ガス供給を停止。ドイツは在庫を積み増しており、供給余力は相応に確保されているものの、需要が高まる冬場にかけては供給不足が懸念される。対ドルでは、ECBが急ピッチな利上げに向かう一方、FRBも利上げペースを加速させると見込まれるため、ユーロ上昇圧力は生じにくく、上値の重い展開が続く見込み。対円では、ECBの利上げ観測などを背景に、ユーロが底堅い展開が続く見込み。ただし、ユーロ圏景気の下振れリスクが大きく、ユーロの上昇余地は限られる見通し。

(市場営業部/治久丸)

【図1】ユーロ主要国10年債利回り



【図2】消費者物価指数と総合PMI



【図3】ユーロ相場 (対ドル、対円)



(出所 Bloomberg)

ご留意事項

- ・本資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、取引の申し込みでも、取引締結の推奨でもなく、売買若しくは何らかの取引を行うことを助言したり、または勧誘したりするものではありません。
- ・本資料の内容につき、当行はその正確性及び完全性を保証するものではなく、一切の責任を負いません。ご利用に際しては、ご自身のご判断をお願いします。
- ・本資料に基づき、お客さまが投資のご判断をされた結果に基づき生じた損害・損失等については、当行は一切責任を負いません。
- ・本資料は著作物であり、著作権法により保護されております。無断で本資料の全部または一部を複製、送信、転載、譲渡および配布することはできません。
- ・本資料に掲載された各見通しは本資料作成時点での各執筆者の個人的見解に基づいており、それらは必ずしも当行の見解を反映しているとは限らず、また、予告なしに変更される場合があります。



商号：株式会社あおぞら銀行（登録金融機関 関東財務局長（登金）第8号）
加入協会：日本証券業協会、一般社団法人金融先物取引業協会、日本商品先物取引協会